



私は自治医大を卒業後出身県の神奈川に戻り、診療所勤務をしながら県立病院、がんセンター(食道外科)で外科の修業に励みました。日本外科学会認定医、日本消化器外科学会認定医を取得し、一九九八年四月から三年間、県立厚木病院外科医長として救急医療やがんの先端治療を含め、外科診療全般に従事しました。

研究成果を国際学会で発表したり、英文原著論文も数編掲載され、横浜市大で医学博士号をいただくこともでき、外科診療に意欲を燃やしていました。

意気に感じて

そんなある日。

「医師確保がでずに困っている診療所を助けてもらえない

地域医療づくりへ連携強化

か」との話が舞い込んできました。一度はお断りしましたが、診療所を擁する相模湖町の熱心な招聘(しょうへい)を意気に

すでに義務年限を修了してお

感じ、全国各地で「医療の谷間に灯をともし」活動をしている所に転身しました。

特に力を入れているのは訪問診療です。在宅ターミナルケアを行い、臨終までご自宅で過ごされた方が、多い年では七人ほどおられました。

診療所に勤務して半年くらいは手術の夢ばかり見ていましたが、外科の患者さんはほとんどなく、内科、小児科、整形外科、皮膚科が大半で毎日が勉強でした。

近隣の先生方や後方病院、自治会や訪問看護ステーションとの地域連携を強化することで、住民が安心して暮らせるまちづくり、地域医療づくりに日夜取り組んでいます。

自分の診断や処方が正しかったのか自信が持てず、小児や高齢者は特に心配で夜眠れず、患者さんのお宅に恥をしのいで、よく電話をしました。

この数年はいわゆる終末期医療のインフォームドコンセントの問題について、地域ぐるみで勉強しています。私はこれらの仕事に、国際学会や英文誌での発表、「血わき肉踊る」手術場に勝るとも劣らない魅力を感じています。

そんな時、患者さんは本当に丁寧教えてくださり、大いに勉強になりました。電話をしたことで、患者さんからおしかりを受けたことは不思議と一度もありませんでした。

住民に支えられ、教えられて、これからも精進したいと思っています。

訪問診療に力

赴任当初は一日二十人程度だった患者数が、その後五十人ほどに増え、収支は三年連続黒字

相模原市国民健康保険内郷診療所

【私の勤務地】日本初の人造湖、相模湖近くに位置する。内科、外科、小児科、整形外科、胃腸科を掲げ、ゼロ歳から百歳までさまざまな患者さんを診療している。東京のベッドタウンとして若い世帯が多いが、住宅地と農地がモザイク状に分布し、独居高齢者も増加している。



胃カメラを行う土肥所長。胃カメラはほぼ毎日行われ、2006年7月までに880例施行、胃がんを13例、食道がんを1例発見、このうち10例が早期がんだった

土肥 直樹 12期生 1989年卒

(次回予定は沖縄県)